近松の浄瑠璃における「剣」の物語*

韓京子**
hanparky@khu.ac.kr

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 頼光四天王物における宝剣
Ⅲ. 神代・古代物における宝剣と三種の神器
Ⅳ. 近松の浄瑠璃における「剣」と「政道」
Ⅴ. おわりに

Ⅰ. はじめに

江戸時代の劇作家、近松門左衛門の時代物浄瑠璃には、「剣」を素材とする作品が多く見られる。そのほとんどは、頼光四天王物に分類される、『酒呑童子枕言葉』(1709)、『嫗山姥』(1712)、『枪狩剣本地』(1714)、『関八州繋馬』(1722)などの作品であり、名剣による鬼退治譚を主筋としている。近松は、これら頼光四天王物以外にも、『日本振袖始』(1718)や『日本武尊吾妻鑑』(1720)、『唐船噺今国性爺』(1721)など、晩年の作品においても、宝剣をめぐる物語を描いている。これら作品は、剣を素材としながら、三種の神器について言及している点が特徴である。

本稿は、近松が、浄瑠璃の中で、剣にどのような意味を持たせ、何を描き出そうとしたのか、また、どのように物語として展開させているのかを考察するものである。これらの作品が近松の晩年に集中していることから、近松の晩年の作品の特徴である、為政者や政道のあり方を説いたり、日本の起源についての関

* This work was supported by a grant from the Kyung Hee University in 2013."(KHU-20130628)
** 慶熙大学校 日本語学科 助教授.

교보문고 KYOBO Book Centre

心などが[1]、剣の物語として、どう組み込まれているのかを考察したい。

近松の頼光四天王物については、内山美樹子や、白方勝、井上勝志の考察[2]があり、『日本振袖始』や『日本武尊吾妻鑑』などの所謂「天皇劇」については、木谷蓬吟や森山重雄の考察があるが[3]、宝剣や、三種の神器に着目した研究はほとんどなされてこなかった。近松が宝剣や三種の神器を作品に描いた背景には、当時高まっていた武国観[4]があったと思われる。この点についてもあわせて考察したい。

Ⅱ. 頼光四天王物における宝剣

近松の浄瑠璃において、宝剣が登場するのは、頼光四天王物と呼ばれる作品群である。近松は『酒呑童子枕言葉』をはじめ、正徳期から絶筆にいたるまで、『弘徽殿鵜羽産屋』(1714)、『傾城酒呑童子』(1718)、『嫗山姥』、『枪狩剣本地』、『関八州繋馬』などを執筆している。そのうち、『弘徽殿鵜羽産屋』、『傾城酒呑童子』を除く作品が宝剣にまつわる話でを描いている。

『酒呑童子枕言葉』は、花山帝の御宇、入内が決まった三の君をさらった酒呑童子を、頼光と四天王が退治する話である。謡曲『大江山』と謡曲『紅葉狩』を踏まえている。謡曲『大江山』は、頼光が大江山に住む酒呑童子を四天王とともに退治する話であり、その退治には剣が用いられた。謡曲『紅葉狩』も、平惟茂が勅命により鬼を退治する話である。ここでも鬼退治に剣が用いられるが謡曲『大江山』とは異り、剣がどこから由来したのかが語られている。平維茂のもとに八幡八幡宮の末社である武内の神があらわれ、鬼退治を命じて剣を授けるのであ

1) 拙稿(2014)「近松の浄瑠璃における台湾への関心」『日本学研究』42、pp.150-153
2) 白方勝(1993)『近松浄瑠璃の研究』風間書房、pp.226-362、内山美樹子(1999)『浄瑠璃史の十八世紀』、勉誠社、pp.41-94、井上勝志(2005)「『枪狩剣本地』の主題と手法」『江戸文学』30、ぺりかん社、pp.123-135
3) 木谷蓬吟(1947)『近松の天皇劇』淡清堂、森山重雄(1981)『近松の天皇劇』、三一書房
4) 江戸時代の武国観についての研究には、前田勉(1997)「近世日本の「武国」観念」(玉懸博之編『日本思想史その普遍と特殊』、ぺりかん社、pp.231-253)、玉懸博之(2007)『近世日本の歴史思想』、ぺりかん社、pp.109-128、などがある。

교보문고 KYOBO Book Centre

る[5]。『酒呑童子枕言葉』では、謡曲『大江山』と謡曲『紅葉狩』と結びつけることで、維茂が鬼退治に用いた宝剣を頼光が引き継ぐものとしている。近松が、謡曲『紅葉狩』を用いて、剣の謂れを語らせているのは、剣に日本不双の名剣として神聖性を持たす意図があったと考えられる。その『酒呑童子枕言葉』で、頼光が剣を手に入れる経緯は、次のよう描かれている。

> 是は日本不双の名剣。此太刀をしろなせば人売りせずに財宝はあきみつれ共。他門へ渡さぬいはれ有。平家の先祖余五将軍平惟茂。信州戸がくし山の紅葉狩の其時。かの山の鬼神女と変し酒をすゝめ。酔の中にとらんとせしに八幡大菩薩。武内の神を御使にての枕上に給はりし宝剣。是を以て惟茂たちまち鬼神をほろぼし給ふ。是をゆづり申なり頼光にささげられば酒天童子を討たんこと神力疑ひ有べからず[6]。

昔、惟茂が鬼を退治したといわれた剣は、諫言のため平安盛に勘当された元執権北白河の広文が持っていた。広文がいかなる理由から平家重代の宝剣を所有することになったのかは明かされていない。ただ、この宝剣を手放さないために、町で娘を拐かし、遊郭に売るという人買いまでしていた。剣の霊性は、広文に剣への執着を持たせ、人買いに手を染めさせるだけでなく、殺人までおこさせるという魔性を帯びるものとされていた。この魔性は、広文がそれにとりつかれ、誘拐した娘を死に追いやった自責の念から自害へいたるという山場を作るという、劇中の役割がもたされたものであった。広文は自害に先立ち、この剣を、頼光へ捧げ、酒呑童子を討たせるよう、加藤兵衛へ譲る。しかし、五段では、頼光と四天王が酒呑童子の寝床の扉を開けることができずに困っているところに、氏神である岩清水の使いがあらわれ、手助けをするという神々の影向によって酒呑童子が退治される様子が描かれている。謡曲『紅葉狩』では、八幡宮の末社武内が授けた剣による鬼退治であったが、『酒呑童子枕言葉』では、前半で強調さ

5)　古山弘志校注(1998)『謡曲集②』新編日本古典文学全集、p.483、.謡曲『紅葉狩』平維茂かやうに候ふ者は、八幡八幡宮に仕へ申す、武内と申す末社の神して候。(中略)八幡宮よく御存知あつて、急ぎこの末社に立ち越え、告げ知らせよとの神勅を受け、武内これまで参りたり。すなはちこの御佩刀を下さるる間、これにてやすやすと鬼神を平げ、急ぎ上洛あるべし。

6) 近松全集刊行会(1987)『酒呑童子枕言葉』近松全集六、p.65

교보문고 KYOBO Book Centre

れていた宝剣によるものとされておらず、氏神である八幡の力による鬼退治となっている。『酒呑童子枕言葉』において剣は、古典(『平家物語』や『平治物語』など)や先行芸能より鬼退治への霊力の意味は弱まり、先述したように愁嘆場を設けるという役割が担わされていたのである。

頼光四天王の鬼退治物語は、『嫗山姥』においても展開される。この作品は、頼光が「天下の重宝」である名剣をさがす物語として構想されたものである。『嫗山姥』初段大序は、次のように、中国の故事を踏まえた序詞[7]ではじまる。

> 漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基をおこし。秦に大阿工市あつて六国を合す。古の君子是を以て自ら守ると。子路がうたひし剣の舞かへす袂も面白き。我が神国の天の村雲百王護国の御守りのゑふす民こそ。めでたけれ[8]。

漢の高祖劉邦が天下を掌握する際に得たといわれる宝剣、太阿という宝剣、子路など、剣にまつわる中国の故事を引き、神国である日本は、天叢雲の加護があるため、安泰であると言祝いでいる。序詞の終わりの部分は、作品世界の時代と場所が明示され、祝意を込めた文言で結ばれる。この祝意は五段目の末尾で、善側が悪側を討つことで世に安定が取り戻され、泰平の世になったことをめでたく祝う詞章と首尾応じるものである[9]。大序が剣に関する逸話ではじまり、祝意の言葉で結ばれているのは、常套的な表現だけではなく、作品全体の構想と関わるものであった。『嫗山姥』では、さらに張華の逸話をふまえ、頼光が紫雲たなびく浜松の宿近辺にて名剣をたずねる展開となっている。頼光が名剣を探し求めるのは、父満仲の武功をつぎ、子孫に伝えるためとされていた。満仲は、はじめて源氏の姓を賜り、天下の守護を勅宣を受けた人物であった。頼光が手に入れた名剣は、ある女が親の敵討ちを果たしたものとして、譲ったものであった。それは、女の家に代々伝わる、文殊という鍛冶が作った剣であった。それを頼光は次のように、丁重に扱う。

---

7) 時代物浄瑠璃における初段冒頭部分の丸本数行の文章
8) 近松全集刊行会(1987)『嫗山姥』近松全集七, p.651
9) 近石泰秋(1965)『近松浄瑠璃の研究』風間書房、p.59

교보문고 KYOBO Book Centre

> 唐土晋の武帝天下を治めて呉国の方に。紫の雲気立つをあやしみに。雷換と云ふ者天文を考へ。土中を掘つて干将莫邪の二剣を得たり。(中略)今宵此太刀手に入こと源家の武功天にかなひし其威徳。(中略)日本無双の名剣。名は体を顕はせば則ち髭切膝丸と名付くべしと。謹みて頂戴あり御子孫長く伝はりし和国の宝と成りにける[10]。

頼光は、晋の張華が名剣を掘り出させたという、中国の名剣にまつわる故事をふまえながら、女に譲り受けた剣に価値を与えていた。この剣は、『平家物語』『平治物語』では、「髭切」「膝丸」として、源家重代の剣とされていたものであるが[11]、それを頼光は「日本」、「和国」の名剣としていることに注目しておきたい。後述するが、源氏の名剣にとどまらず、日本を治める剣として、意味付けているのである。それは、頼光に日本の為政者を仮託したものといえるのである。

しかし、『嫗山姥』においても、剣は、初段においてのみ重きが置かれ、作品全体を通しての役割はなしていない。ただ、剣にまつわる中国、日本の逸話など、様々な剣に関する故事を多数引用していることから、近松が剣へ関心を抱いていた様子がうかがえる。『平家物語』剣巻の序も、中国の剣に関する故事の言及から始まっており[12]、近松は作劇にあたって、中世から近世にかけて宝剣や名剣への関心の高まりから作られた『平家物語』剣巻をはじめとする『剣巻』と呼ばれる作品群を踏まえていたと考えられる。

『嫗山姥』では、頼光と四天王の鬼退治は、「天下泰平の忠義をあらは」すもの、そして、「敵を亡ぼす前表」とされていた。前者に関しては、伝説においても鬼退治は勅命であった。『嫗山姥』で新たに加えられたのは、後者の「敵」退治である。すなわち、悪鬼そのものは高懸山に住み民を悩ますものとして登場しているが、それほど威力を持つものとされてはいない。むしろ平正盛や右大将高藤

10) 近松全集刊行会(1987)『嫗山姥』近松全集七, pp.667-668

11) 守髄憲治校注(1959)『近松浄瑠璃集』下、日本古典文学大系、岩波書店、p.380、『嫗山姥』補注に、『平治物語』一に「文殊という鍛冶の作なり」とある。

12) 「沛公は貴坊の属鏤を伝へ、白蛇の霊を切り、天帝の名を出だすを得たり。始皇は、荊軻(けいか)の匕首を取つて、燕使の命を断ち、聖明の運を出だす事を全うす。凡そ白髦黄鉞の徳、弓馬矢石の勢、五戈の計、四義の品、皆これ国を治むるの術、位を保つの基なり。尤も賞翫せらるべきは刀剣の類なり。抑々日本に多くの剣あり。所謂宝剣、十柄剣・鬚切・膝丸・小鴉なり。鬚切・膝丸と申す二つの剣の由来を尋ぬれば、人王五十六代の帝をば、清和天皇とぞ申しける。」永井一孝校注(1910)『平家物語』、有朋堂、p.1

교보문고 KYOBO Book Centre

を、「平の正盛と云ふ恐ろしき鬼神」、「清原の右大将高藤と云ふ。大悪人の鬼神と棟梁」と称し、鬼同然であるとしている。頼光と四天王の実の鬼退治は、讒者平正盛と高藤を誅することであり、これらを討つことで、実の「天下泰平」がもたらされるのである。

さらに、近松は、鬼退治の物語を、『枹狩剣本地』においても取り上げる。謡曲『紅葉狩』を踏まえ、勅命による惟茂の鬼退治を主筋としつつ、作品名からもわかるように、「剣」に焦点をあて、宝剣の由来を語る話としている。謡曲『紅葉狩』は、先述したように、惟茂が狩りの際に、紅葉狩りに来た女臈たちの酒宴に誘われ、酔い伏していたところ、八幡の末社である武内の神があらわれ、彼女たちが鬼であることを告げ、神剣を授けるという話である。謡曲『紅葉狩』では、惟茂は武内の神から剣を授かったものとしていたが、近松は『枹狩剣本地』において、神ではなく天皇から授かるものと、脚色している。その剣は次のような謂われを持つものであった。

> 此御太刀は神代より伝はりし平国の御剣とて。八幡宮の御母神功皇后異国退治の宝剣也。(中略)此太刀を帯し戸隠山に駆入て悪鬼の根を立。国家安全の功を顕し朝家を守護し奉れ[13]。

それまでの頼光物における、鬼退治のための剣に、神功皇后の異国退治の剣であるという新たな神話が加わったのである。『枹狩剣本地』では、頼光の鬼退治は、単なる鬼退治の意味ではなくなっていた。帝の病、そして民まで悩ます「変化」を退治するものだけでなく、それが国家の安全、皇室の守護へとつながるものとしている。『嫗山姥』でも、剣を「日本」、「和国」の名剣としていたように、皇室、国家を守るためには、源家伝来の剣のままでは、いけなかったのである。そのため、新たに由来を付け加えているのである。

『酒呑童子枕言葉』で、広文が平家伝来の剣を手放せずに、人買いに手を染め、拐かした娘を死に追いやっていたことは、述した。『枹狩剣本地』では、下賜された平国の剣を守護していた帯刀太郎が、騒動に巻き込まれ、剣を持ったま

13) 近松全集刊行会(1988)『枹狩剣本地』近松全集九, pp.369-370

교보문고 KYOBO Book Centre

ま行方不明になったため、惟茂の家臣らが剣の探索をしていた。帯刀太郎は「只一筋に御太刀を大事にかけ。前後をわかず落し程に物にさそはる心地にて。そこ共しらぬ山々を二三日はさまよひしが」と、剣の魔性にとりつかれ、正気でないままさまよっていたのである。我に返った帯刀は妻と子房若に、それまでの経緯をうちあけるため館へ戻る。元家来であった久作に預けてある剣を惟茂へ献じるよう頼み、自害する覚悟で帰ったのである。しかし北の方に盗賊と誤解され斬られてしまう。太郎の死後、その遺言通りに北の方と房若は久作の家を訪れるが、諸任と内通していた久作は、欲に目がくらみ、房若を殺害して、平国の剣を奪い、一子万虎の出世を計ることをもくろんでいた。久作の女房は、久作の心底を見抜いていたため、万虎を房若の身代わりにたてていた。我が子と知らず、万虎を殺してしまった久作が、怒って女房を惨殺すると、斬られた首は剣をくわえ飛び去り、後に惟茂へ剣を献じるという展開となる。

『酒呑童子枕言葉』では、広文が剣を加藤兵衛に託したが、『枹狩剣本地』では、久作の女房が死んでもなお、剣を手放さず、惟茂へと奉じる。この場では、「眉間尺」の故事を踏まえつつ[14]、執念の強さをあらわしていた。

そして、四段目で、謡曲『紅葉狩』を踏まえた筋(場)へとつながる。惟茂は戸隠山へ入り、紅葉狩り中の上臈たちと酒宴となったが、実は女達は内裏で射殺された仲間であり、変化の姿をあらわす。そこへ紅葉の枝にかかっていた剣が自ずと抜け出て、鬼神を追い払う。剣を手に取ろうとする惟茂に、久作の女房の霊は、主の遺児房若の出世をかなえることを引き替えの条件とする。そして、次のように、剣の謂われを語るのであった。

> 先あしはら大日本。神代三ふりの宝剣有。一つは天のはぎり共。又は十握の剣共申す。大和の国石上の御神体に立給ふ。又一ふりは八雲たつ。八股の蛇が尾さきより顕れし天の村雲の宝剣。そさのおの尊祇園牛頭天皇の御剣なり。今一ふりはそさのおの尊の御子。日吉山王権現共。三輪の明神共おがまれたまふ。大あなむちの尊の御剣。事もおろかや是。此。この御太刀にてましますも也。(中略)神功皇

14)干将莫耶の故事は、『今昔物語集』や『太平記』に見られるもので、近松は『平家物語』「剣巻」以外にも、剣に関する多くの故事を引用している。近松の強い、剣への関心をうかがうことができる。

교보문고 KYOBO Book Centre

后神風や天照す。太神宮の告によつて。新羅のゑびすを討へしと。御身もさすが只ならぬこもち月の中空に。韓国さして。責入給へは。(中略)此太刀おのれと抜け出て。ひらりひらひら切立切立三十余ヶ度の。戦ひに味方は討たれず手もおはずヲヽヲヽヲヽヲヽ新羅百済高麗国の。あらきゑひすを爰に追つめかしこにおひ。追つめ追つめ責ほろほして。(中略)上にめくみのまつりごと万民にうるをひて。風雨随時に治る事此太刀の威徳ぞとて。太平国の文字によつて平国の。御剣と。申奉る15)。

これは、四段目に設けられた節事<剣の本地>で、初段において、帝が惟茂に授けた「神功皇后異国退治の宝剣」である平国の剣について、詳しくその由来が語られている。剣の謂われについて、日本には神代から伝わる三振りの宝剣があるということから語りはじめ、神功皇后が三韓責めの際に用いた剣であると話を運んでいる。単なる鬼退治の剣ではなく、異国まで従えた「平国の剣」なのであった。近松の頼光四天王物における剣は、源氏重代の宝剣から、日本、和国の名剣、そして、国を治める「平国」の剣へと、その意味が変化していることがわかる。

『枹狩剣本地』<剣の本地>において、とりあげられた、神代の剣は、十握の剣、天叢雲の剣(草薙の剣)、大己貴尊の剣である。大己貴尊の剣に関しては、『日本書紀』においても、葦原中国を平定した「広矛」への言及はあるものの、「剣」そのものは登場しない。この剣を神代から伝わる三振の剣の一つとしているのは、近松の創作であるのか、管見ではその典拠を見つけられておらず、今後の課題としたい。では、近松は神代の剣に対して、どのように認識していたのであろうか。次の章にて考察する。

Ⅲ. 神代・古代物における宝剣と三種の神器

近松は、頼光四天王物ではない作品においても、剣の物語を構想として用い

15) 近松全集刊行会(1988)『枹狩剣本地』近松全集九, pp.467-471

교보문고 KYOBO Book Centre

ている。神代を背景とした『日本振袖始』で十握剣を、そして、古代を背景とした『日本武尊吾妻鑑』では、十握剣と草薙剣をとりあげている。これら神代から伝わる剣については、三種の神器としてその起源が語られている。近松は、これらの作品以前に『吉野都女楠』(1710)で、「三種の神器」に関して言及していた。

『吉野都女楠』は、『太平記』をもとに、足利尊氏の東上から南北両朝が成立するまでが描かれている。その中で、吉野の皇居へ三種の神器が護送されることをめぐって、神宝の話が展開される。勾当内侍と高家の妻は、内裏から三種の神器を運び出してきたが、三輪の里にいたって、三種の神器をねらう尊氏側の大森彦七らに襲われる。しかし、神鏡や宝剣が自ら飛び出す霊力によって、大森彦七らは追い払われる。北畠親房、新田義貞、楠正行が駆けつけ、さらに吉野へ向かっていた尊氏が、行き会うことになる。そこへ、和田新発意が玄恵法印の使いとしてあらわれ、南北両朝の成立(「量仁親王を新帝として京の内裏に、後醍醐天皇を院として吉野の内裏に」)と、「新田足利和睦」して、それぞれを守護することを伝える。その際に、次のような奇瑞があらわれたのである。

> 白雲たな引異香くんじ。杉の梢にかゝりしはふしぎ也ける次第也。雨宝童子の御相好。たへ成御こゑあざやかに。天に二つの日なし地に二人の王なし。量仁親王に新帝の位をさづけ。後醍醐の天皇は院の御所とあをぎ。帝都は高氏是をかため。吉野の都は義貞しゆごし奉れとの神勅也。我国の三つの宝のあらんかぎりは。国とみ民もゆたかにて敵する者の有べきか。宝剣のゐとくうたがふことなかれとの給ふ所に有がたくも宝剣は盛長が首をさしつらぬき。(中略)見よ見よ悪魔降伏の宝剣は勇神璽は智。我内侍所は仁のかゞみ。智仁勇の三宝も仏法僧と王法の。民安全に守るべしと御託宣のうちよりも。御かたちは鏡と現じ内侍の袖にうつらせ給ふ。天下一統源氏一統太平国に太平の。君が威光は万々歳治る。御代こそ久しけれ[16]。

雨宝童子とは、両部神道の神で、天照大御神が日向に下生した時の姿をいう。その雨宝童子があらわれ、南北両御所に新田義貞と足利尊氏が各々仕え、和睦することを神勅であると告げるのである。天に二つの日がないように、地に

16) 近松全集刊行会(1987)『吉野都女楠』近松全集六, pp.453-454

교보문고 KYOBO Book Centre

も天皇が二人いることはできないと雨宝童子、すなわち天照大御神の言葉として語らせている。近松は、『太平記』からは離れ、南北の両朝を認めて、足利尊氏を逆臣として扱わず、雨宝童子を登場させることで中立的な態度をとったのである。そして、足利尊氏に与していた大森彦七盛長は、「国賊」[17]として、劇中の「悪」を担わされ、宝剣に討たれるのである。新田義貞と足利尊氏の和睦を描くため、足利尊氏を逆臣として描き通すことができず、彦七に悪を担わせる結果となった。

『吉野都女楠』では、三種の神器があるかぎり、国と民は安泰であるとしている。三種の神器は国家守護の印であり、帝位をあらわす証でもあった。このことについては、『弘徽殿鵜羽産屋』においても、「日本三つの御たから。神璽宝剣内侍所是をもつて天子のしるし」[18]と、している。また、剣に「勇」、神璽に「智」、鏡に「仁」の意味を与えているのは、中世日本紀以来、三種の神器は「三徳」をあらわすものという認識を受け継いでいる。三種の神器が持つそれぞれの意味、三徳については、『日本振袖始』に詳細に語られる。『日本振袖始』では、「あのまん中に月日のごとく。てりかゝやかせ給ふこそ御鏡と申物そうな。右は神璽の御箱左の箱は十握の御剣。則三種のお宝物。中にも八咫のおかゞみは正真の天照太神様。万の願も叶ふと聞。」[19]と、三種の神器を鏡、神璽、十握剣とし、鏡は天照大御神であり、いかなる願い事もかなえる力があるものとしている。このように、近松は浄瑠璃の中で、三種の神器のそれぞれが意味する徳目について、そして、帝位の象徴であることを繰り返し、言及している。

『日本振袖始』は、素戔嗚尊が八岐大蛇から、宝剣を奪い返す話である。記紀神話における素戔嗚尊の八岐大蛇退治譚をもとにしているが、頼光四天王物のように、宝剣探しの物語となっていることに、注目される。次は、その大序の序詞に続く詞章である。

久かたの日の神の御影移りし八咫の鏡。是を見ること吾を見るがごとくせよと

17)「ヤイ礼儀しらずの国賊。楠一族国の為君の為死を善道に守て。いさぎよく切腹せしを」p.377
18) 近松全集刊行会(1988)『『弘徽殿鵜羽産屋』近松全集九、pp.213-214
19) 近松全集刊行会(1988)『『日本振袖始』近松全集十、 p. 398.

교보문고 KYOBO Book Centre

の神勅にて。民あはれみの仁の道。百王の後迄も内侍所とあがめらる。扨又御先祖伊弉諾の尊より御相伝の十握の宝剣。是勇の形義の理。御伯父素戔嗚の尊たけくいさめる御器量とて。此宝剣を預り王を後見ましませば。神璽に不測の礼智有三種の宝の神徳に家にたのしみ野に耕し。手うつてうたふ土民迄。式を越さる玉垣の内つ御国そ道広き[20]。

天照大御神の孫瓊々杵尊が、歴代王のはじめとして(「瓊々杵の尊と申すこそ代々に王たる。始なれ。」)、国を治めている。八咫の鏡は天照大御神の影を映すもので、代々内侍所として崇められている。十握の剣は、伊弉諾尊から伝わるものであり、今は素戔嗚尊が預かり帝を後見しているので、世が泰平であると言祝がれる。しかしその後、素戔嗚尊が宝剣を失うことで宝剣探しの旅に出るという展開となる。美濃国の悪鬼が、十握の剣を盗もうとするのは、「此日の本に剣の威徳をけづらん為」であった。剣を奪うことで、剣の威力を失わせ、魔界へと落とそうというものである。ここでも、剣は世の安泰の印でもあった。さらに、「葦原国の武勇の破滅」であるともされており、宝剣がなければ素戔嗚尊の武勇も保てないものとして、剣の持つ威力が強調されている。しかし、実際に剣を奪ったのは悪鬼ではなく、岩長姫であった。素戔嗚尊は、宝剣を奪われまいと気を引き締めていたが、かねてから心をかけていた木花開耶姫が瓊々杵尊の后となったことに気をとらわれていたところを、天稚彦に化けた岩長姫に剣を奪われてしまう。これが八岐大蛇であった。

『日本振袖始』において、三種の神器は、鏡を「民あはれみの仁の道」、十握の宝剣を「勇の形義の理」、神璽を「不測の礼智」と、仁勇智の三徳をあらわすものとしている。ここではさらに、三徳だけではなく、「義」、「礼」という儒教的徳目が付け加えられている。近松は、『唐船噺今国性爺』においても、三種の神器に、「五常」の意味を持たせていた。近松の晩年の作品に、三種の神器について繰り返し言及されていることから、近松がそれらへ非常に関心が高かったことがうかがえる[21]。三種の神器があらわす徳目は、為政者が備えなければいけない徳目

20) 近松全集刊行会(1988)『『日本振袖始』近松全集十、 p.390.
21)三種の神器には、十握の剣でなく、草薙の剣が含まれるが、『日本振袖始』では、十握の剣が八俣大蛇が隠し、その尾から取り出した剣を「天むら雲の御剣」(「尾づゝにかくせし十握の宝剣や

교보문고 KYOBO Book Centre

でもあった。近松は、理想的為政者像を、三種の神器に仮託して示しているのである。

素戔嗚尊の宝剣を奪ったのは、「八万年が其間念をかけたる」と、かねてからねらっていた八俣大蛇であった。十握の剣を奪われた素戔嗚尊が、宝剣探しの旅に出ることで、八俣大蛇退治譚へとつながる。旅の途中、素戔嗚尊は熱病に冒された稲田姫を助け、大蛇の人身御供にされる稲田姫に、ははぎりの剣をもたせた。大蛇に呑み込まれた稲田姫は、その剣で大蛇の腹を切り裂いて、十握の剣を取り出すという、記紀神話における八俣大蛇退治譚とは異なる筋をもつ[22]。記紀神話にはない、宝剣探しの物語とすることは、剣の意味を強調する近松の意図があった。第五段の結句は「君が代は八島の外の国迄も日本の威を振袖の人民無病延命に五穀は家に満ちける」[23]と、外国までも及ぶ日本の武威を称え、その武威による平穏な世を祝福する内容の文句で結ばれている。大序と呼応するものであるが、大序では三種の神器の徳によって、世が太平であると語り、結句では、剣によって「日本の威」をとどろかしているとしているのである。

十握の剣に関しては、『日本武尊吾妻鑑』に取り上げられている。景行天皇は、第一の宮大碓尊が邪悪者であることから、第二の宮を姫君として育てていた。そして、その姫(神賢姫)[24]に梟師を滅ぼすよう、宝剣を授けた[25]。日本一の勇者を自負し、天下を覆すことを企てた八十梟師は「何条おのれらか剣。刺す

すやす取て候と。右と左に宝剣利剣。(中略)天のむら雲の御剣と名付大日本宝そろふぞめでたけれ」(近松全集刊行会(1988)『日本振袖始』近松全集十、 p. 486)と、「三種の神宝」として扱っている。

22) 「時に素戔嗚尊、乃ち帯かせる十握剣を抜き、寸に其の蛇を斬りたまふ。尾に至り剣の刃少しく欠けたり。故、其の尾を割裂き視せば、中に一の剣有り。此所謂草薙剣なり。草薙剣、此には倶娑那伎能都留伎と云ふ。一書に云はく、本の名は天叢雲剣。蓋し大蛇居る上に常に雲気有り。故以ちて、名づくるか。日本武皇子に至り、名を改め草薙剣と曰ふといふ。素戔嗚尊の曰はく、「是、神しき剣なり。吾、何ぞ敢へて私に以ちて安かむや」とのたまひ、乃ち天神に上献ぐ。」小島憲之(1994)『日本書紀①』新編日本古典文学全集、小学館、 p. 93

23) 近松全集刊行会(1989)『日本振袖始』近松全集十, p.487

24) 『日本王代一覧』にのみ見られる読みであることから、近松はこの書を参考にしていたと考えられる。近松古代史話会(1992)「近松の古代史」『歌舞伎研究と批評』8、p171

25) 「真の女と心をゆるす八十梟師が閨の中。思ふまゝにちうばつし西国をしたげへ帰洛あれと。御衣の下より宝剣取出し。是ぞ神よりつたへ先代伊勢に納りし。天の村雲の剣。千万騎の味方と成身の守り」近松全集刊行会(1989)『日本武尊吾妻鑑』近松全集十一, p. 596

교보문고 KYOBO Book Centre

共突く共我身には立まじと思ひしに」と、大抵の剣では滅ぼされないものとして登場するが、「王位にそむく天罰の剣」によって、討たれることとなる。八十梟師は尊へ「日本武尊」の名を奉って自害し、日本武尊は忍熊征伐へと向い[26]、話は草薙剣の伝説へとつながる。忍熊の手下は東夷征伐に向かった日本武尊に従うと見せて酒宴をひらき、武尊が眠っている間に火をつけ殺害しようとする。危機に陥った武尊は、次のように神に祈り誓う。

> 天の岩倉にして天照神。吾子孫は瑞穂の国の君たるべし。宝祚の栄へんこと天土共にかぎりなく、代を守らんと御神誓、一ツの験をみせ給へと腰に帯せる十握の御剣、敵に向かって投げ給へばたちまち鞘をぬけ出てはためきひらめきかり廻す。(中略)敵の上にも燃へかかり、一騎ものがれぬ煽ち死に、剣はもとの鞘におさまり、これより十握をくさなぎの御剣とあらため、末代まで三種の神器の一つ神徳の程類ひなし[27]。

日本武尊は、天照大御神に祈誓をかけ、十握の剣を投げて、忍熊らを撃退する。先述したが、忍熊退治の際、神賢姫(日本武尊)は、景行天皇から伊勢に納まっていた十握の剣を授かっていた。『日本書紀』では、日本武尊が東国征伐の際、剣を授かるのは、伊勢大神宮の倭姫からであった。親子の愛情をあらわし、討伐が親子の協力関係のもとで行われたものとする見解もあるが[28]、近松は、「代を守らん」ということを強調したものと考えられる。『日本書紀』で、日本武尊が伊勢大神宮に立ち寄るのは、天照大御神の加護を願うためであるが、『日本武尊吾妻鑑』では、忍熊討伐を祈誓によるものとして、天照大御神の霊験、剣の霊力を際立たせている。五段目の結句も「草なぎの剣になびかぬ方もなく、百億万歳末かけて。民草五穀も穂に穂をめぐみ国に半点くもりもなき剣の威徳ぞあきらけき」と結び、武を象徴する剣の威徳を強調している。このように、近松の神代物や古代物において、剣は三種の神器の一つとして、国の安泰を保証するものとして描かれている。そこには、剣の威力が強調されていることがわかる。江戸時代にお

26)『日本書紀』では、武内宿祢を大将とした神功皇后軍により、忍熊が滅びる。
27) 近松全集刊行会(1989)『日本武尊吾妻鑑』近松全集十一, p.596
28) 近松古代史話会、前掲論文、p.172

교보문고 KYOBO Book Centre

いて、「剣」はどのように思われていたのかについては、次の章にて考察する。

Ⅳ. 近松の浄瑠璃における「剣」と「政道」

近松が『日本振袖始』や『日本武尊吾妻鑑』など、素戔嗚尊や日本武尊の武勇を描いた背景には、当時高まっていた武国観があると考えられる。江戸時代初期、世界地理志『華夷通商考』を著述した西川如見も「日本は武勇を本とし文筆を末として」、「日本は武国にて、質素を尊ぶ国なり」、あるいは、新井白石も「我国は万国にすぐれて武を尚ぶ国とこそ古より申し伝へたれ」と、日本を「武」の国として意識していた。近松の浄瑠璃には、特に、記紀神話をもとにしながらも、「剣」の力が強調されて描かれていた。そこには、『平家物語』「剣巻」に見られる刀剣を国を治める道具として[29]、さらに、「天瓊矛」を「武」の象徴とみなす武国観が存在していた。近松は『日本振袖始』大序に「ちはや振袖広戈の国たいらけく御す。天照太神の御孫。天津彦火瓊々杵の尊と申こそ代々に王たる始なれ。」[30]と、「広戈」に触れている。『日本書紀』巻第二には、「乃ち国平けし時に杖けりし広矛を以て、二神に授けまつりて曰はく。吾、此の矛を以ちて卒に治功有り。天孫、若し此の矛を用ちて国を治めたまはば、必ず平安くましまさむ。」[31]と、大己貴神が国譲りの際に治国に用いた「広矛」を神に献上していた。広戈を神代に世を平定したものとして言及しており、「天瓊矛」と同じような意味として捉えていたと考えられる。

前田勉によると、近世日本の国家は武士が支配した「武威」の国家であった[32]。「神国」あるいは「皇国」が主に皇統の一系性に関わる言葉であるとすれば、武威の国日本を象徴する言葉は「武国」であったという。また、近世日本の武

29) 「国を治むるの術、位を保つの基」永井一孝校注(1910)『平家物語』、有朋堂、p.1
30) 近松全集刊行会(1989)『日本振袖始』近松全集, p.387
31) 小島憲之他校注(1994)『日本書紀①』新編日本古典文学全集、小学館、p.117
32) 前田勉(1997)「近世日本の「武国」観念」『日本思想史―その普遍と特殊』pp.231-253、前田勉(2001)「「武国」日本のなかでの朱子学の役割」『日本思想史学』33、pp.30-40、以下、武国観念については、前田勉による。

교보문고 KYOBO Book Centre

国観念の特質は、「神国」であるとともに「弓箭きひしき国」ということが結びついていた点、すなわち「武国」の起源が記紀神話に置かれたことにあるとする。前田は、この連結をなしとげたのが吉川唯足であったという。吉川神道では武国を記紀神話、就中「天瓊矛」によって正当化していた。吉川唯足、山鹿素行のような、「天瓊矛」神話を起源とする「武国」観念の成立は十七世紀中頃であり、このような考え方は、近世全体を通じて広く見られるものであった[33]。さらに、正親町公通の門人跡部良顕の『三種神器極秘伝』に、「矛は剣なり。」[34]とあるように、「矛」は「剣」と同一視されていた。山崎闇斎は、『神代巻講義』によると、次のように刀剣を国を治めるものとして捉えている。

> 昔カラ、日本ノタイラゲ様ゾ、皆剣ゾ。天上ノ事ハ只今ノ禁裏也。物ヲ平グルハ剣ヲ以テキリタイラグルハ、昔ノ素戔嗚、大己貴ノガ、今ノ将軍ガソノナリゾ。ゾント神代カラ日本ハカフシタコトゾ[35]。

剣を持って、世を平定したことは、素戔嗚尊をはじめ、大己貴尊、そして、今の徳川の将軍まで一貫して同じであり、神代から継承されているものであったことを説く。吉川神道の流れを汲み、山崎闇斎が提唱した垂加神道は、正親町公通が継承、発展させたものであった。近松は青年期に正親町公通に仕えたという関係から、垂加神道の影響を受けていたことが推測されるのである。

熊沢蕃山著とされる『三輪物語』巻六には、「日本は武国なり。(中略)兵を以て国の第一とする事なり。中国にては黄帝、日本にては八幡帝、軍神たるによりて(中略)国を武国と称せられ、異国より恐れて手さゝぬ事は応神天皇の御功徳にておはします」[36]と、日本が武国であるため、外国からの侵略がなされないとしている。また、松下郡高が、「今百余年太平の恩沢をこうむっているのは、ひとえに御武徳の御影」[37]と述べるように、世が泰平なのは、日本が武威をもって

33) 前田勉(1997)、前掲論文、p.239
34) 国書刊行会(1910)跡部良顕『三種神器極秘伝』、『神道叢説』、p.304
35) 平重道校注(1972)山崎闇斎『神代巻講義』『近世神道論前期国学』日本思想大系39、p.170
36) 国書刊行会(1910)熊沢蕃山『三輪物語』、『神道叢説』, pp103-104
37) 前田勉(1997)前掲論文から『神武権衡録』(松下郡高)巻四を再引用。p241

교보문고 KYOBO Book Centre

国を治める武国であるためであると誇りをいだくようになる。そこには、日本は神国であるという意識が同時に働いていた。松下郡高は、のち、本居宣長、平田篤胤などの国学者にも影響を与えた人物として重要である[38]。松下郡高は、「神武一体」として、日本固有の風俗を神と武と一体のものとみなしていた[39]。近松茂矩も、「神道は武道の根也。武道の本は神道也。道に二つなし。即神武一道也」[40]と、神道と武道は別のものではないと主張している。神国ということと武国であるということは、切り離される意識ではなかったのである。そうして、日本は神国であり、武威をとどろかす武国であり、外国が恐れる国であることを誇る自国・自民族優越意識が広く持たれるようになる。前田勉によると、神功皇后の「三韓征伐」や秀吉の朝鮮出兵こそが「武国」の証しであり、日本には絶大な武力があるという考え方が、「徳川の平和」のなかで醸成されたとされる[41]。

浄瑠璃においても、近松の『国性爺合戦』、『本朝三国志』、近松半二の『神功皇后三韓責』(1719)などが、そのような神国・武国意識を反映して作られたものといえる。江戸時代以前にも、神国であることを誇る意識は、先行芸能にもあらわれていたが、武威をひけらかすものではなかった。例えば、謡曲『白楽天』では、白楽天が日本の知恵を計れとの宣旨によって渡航し漁翁と和歌と詩賦の応酬をする。その際に漁翁は、日本では生あるものはみな歌を詠むと自慢する。後シテの住吉明神は海青楽を舞って神力を示し、白楽天に帰国するよう促す。さらに伊勢、石清水の神も現れ舞を舞い神風を起こして白楽天を帰すというものである。間狂言には「わが国は小国なれども神国にて知恵第一の国」、「わが朝は小国なれども神国にて人間は申すに及ばず鳥類畜類までも歌を詠み候」と繰り返し、「唐土にまさる神国」であることを強調する。それは、武威を誇るのではなく、日本の知恵を誇るものであった。

この知恵を誇るという考え方は、古浄瑠璃『楊貴妃物語(玄宗皇帝)』でも取り

38) 本居、平田などの国学者も、我が国民性の発揚に就ては、郡高の説に負うて居る所がある。亘理章三郎(1943)日本魂の研究』、中文館、p.413

39) 神道は此国の武道なり。神と武と分けて二つあるものにあらず。「神は則上古の武人なり。其の外、神の常に行ひたまく道を武といふ。神は体にして武は用なり。体用一致なれば、神と武との二つに毫末も甲乙なく、其の本は一つにして権衡の如し」。

40) 前田勉(1997)前掲論文から『神国武道弁』(近松茂矩)を再引用。p.235

41) 前田勉(2001)前掲論文、p.32

교보문고 KYOBO Book Centre

入られれている。玄宗が白楽天に世の乱れの原因を問うと、楊貴妃は日本の熱田大明神の神霊であり、唐の知恵をくらますためにやってきたものであるという話である。草薙の剣を神体とする熱田大明神が楊貴妃として登場し、唐を混乱に陥れるという設定は、日本の神による中国の侵略であり[42]、仙術を駆使する仙人が夜叉神により追い払われるなど、日本、日本の神を優越視する意識がうかがえる。謡曲『白楽天』でも、住吉明神や石清水の神が神力を示すが、それは白楽天を追い返すものであった。それが、古浄瑠璃『楊貴妃物語(玄宗皇帝)』において、熱田大明神が、唐に行き、世を混乱に陥れるということは、武力を直接示してはいないが、神国・武国日本の発揚といえるのである。謡曲『白楽天』では、外敵の侵略に対する警戒心を表す時、日本は神国であるため無事であるという表現が用いられていた。しかし、近松の『国性爺合戦』においては、「討てば勝ち。攻むれば取る末代不思議の智仁の勇士。玉あるふちは岸やぶれず。龍すむ池は水かれず。かゝる。勇者の出生す国国たり君君たる。日本の麒麟是なるはと異国に。武徳をてらしけり。」[43]や、「日本の加勢と披露せばもとより日本弓矢に長じ。武道鍛錬隠れなく。韃靼夷聞き怖ぢして」[44]とあるように、日本の武威が外国をおびえさせ、したがわすものとしている。神の庇護というだけではなく、武威が外国を恐れさせるものと、変化しているのである。中世から近世へと、日本の優越意識の性質が変化していることに注目される。

『唐船噺今国性爺』(1722)は、台湾でおこった朱一貴の乱を扱った作品であるが、世を治める道具として、日本の三種の神器を引き合いに出しつつ、「剣」を重要視している。福建省国守六安王は位簒奪の謀叛を企てており、その成就を期して、池の中からあらわれた三足両耳の鼎の地金で剣を鋳させる。その際、従事官金海道が、次のように、日本の剣をあてこみ、鼎が持つ徳について説く。

> 三足両耳の大鼎(中略)此鼎を申は。いにしへの聖代の盛なりし時。唐土九州の金を献し九つの鼎を鋳させ。山川草木までその国々の形象を鋳付。代々の天子御

42) 諏訪春雄(2007)「近世文芸のナショナリズム―下凡・本解・本地―」『日本文学』、pp.24-30
43) 近松全集刊行会(1988)『国性爺合戦』近松全集九, p.711
44) 近松全集刊行会(1988)『国性爺合戦』近松全集九, p.737

교보문고 KYOBO Book Centre

位を嗣給ふ信として伝はりし御宝。音に聞日本の内侍所も是に々と承る。しかるに秦の始皇の奢り。げきせいより宝の鼎頽敗し失せ果てしに。(中略)鼎の徳を以天下を治るなどゝとは。とつと昔あほう律儀な。聖人賢人慈悲もつはらのまつりごと。末世当代は慈悲仁義もいらず。剣を以かたはし切取にしくはなし45)。

この鼎は秦の始皇の代に失われた御宝で、帝位を記すものとして、日本の「内侍所」と同じであると説明している。先述したように、近松は『弘徽殿鵜羽産屋』でも、「三種の神器に火をかかえ。内侍所しるしの御箱失せ給へは此日本は魔界となる。」46)と、三種の神器は、帝位のしるしだけでなく、国家安泰に必需のものとして捉えていた。江戸時代の神道家、井沢蟠竜(1668－1731)も、『武士訓』(1715)で、「八坂瓊神璽乃勾れるがごとく曲妙をもつて。天が下の政をおさめ。白銅鏡八咫鏡のごとく分明をもつて利。山川海原までを看行し。この霊験草薙剣を提げて。天下を平げ。万民を利せしめ給へとなり。」と、記述しているように、三種の神器の徳により、世が治まるということは、当時は広く認識されていたことであった。

『唐船噺今国性爺』は、朱一貴(実は景泰王の王子)と呉二用らが暴君六安王を滅ぼす物語であるが、その企てにも宝剣が必要とされていた。六安王が作らせた剣を、朱一貴らも「宝祚守りの霊剣」として認識していたのである。近松は『唐船噺今国性爺』でも、正統たる帝の証である三種の神器が持つ徳によって国が治まるものとしているのである。しかし、六安王は、末世の当代には、徳によって国を治めることはできず、剣をもって武力をふりかざす統治方法にかなうものがないと主張する。注目すべき点は、剣の徳による統治ではなく、直接武力を行使する統治へと、その為政者の政治への態度への言及がなされていることである。六安王は、鍛冶に池から掘り出された鼎から剣を鋳させるが、重要視していたのは、「所詮剣の切れ次第」と、切れ加減のみであった。その六安王の主張に民が次のように異見する。

45) 近松全集刊行会(1990)『唐船噺今国性爺』近松全集十二, p.330
46) 近松全集刊行会(1988)『弘徽殿鵜羽産屋』近松全集九、p.220

교보문고 KYOBO Book Centre

そもそも天子将軍の宝剣とは。能きるゝ計を宝とせず。仁の地金義のやき刃。礼と信とをかざりとし智慧の箱におさめ。自衛をもとゝするの徳。たゝかわずして国治り民したがふ。(中略)日本には太刀と訓じ。大治とは大きに治まると書文字。此徳を以味方の軍兵に下知し。敵にむかふ時は一振の剣千振万振の剣と成て[47]。

天子や将軍などの為政者の剣は、よく切れることも重要であるが、武器を用いることなく、世が治まり、民が自ずと従うようにすることが重要であるとする。為政者の剣は、「仁義礼智信」の儒教的徳目である五常を備える必要があると説く。その際、日本の太刀を例として取り上げ、「日本には太刀と訓じ。大治とは大きに治まる」と、「太刀」についての意味付けをしているのである。中世以来、三種の神器は「仁智勇」の三徳をもって説明され、近松も「宝剣は勇神璽は智。我内侍所は仁のかゞみ。智仁勇の三宝」(『吉野都女楠』)と、捉えていたが、最晩年の作品『唐船噺今国性爺』では、剣にさらに、五常の意味を持たせたのである。それは、為政者が持つべき政道へついての忠言であったと考えられる。

近松は頼光四天王物においても、頼光を「神武智勇の名将の三徳兼備の威」(『嫗山姥』)が備わった人物としていた。近松は自作の頼光物を「宝剣探し」の物語として展開させているが、そこには、頼光にあるべき為政者像を仮託していたのである。『酒呑童子枕言葉』では、娘が人商人によって拐かされたことを訴えた民が、次のように頼光を批判している。

度々訴訟申せ共。変化の業とて追かへさる。是御吟味のくらき所。変化流行を幸に人商人のはびこり候。此御心つかざるは、御政道の失ならずや[48]。

人商人に娘たちが誘拐されていることに、気付かず取り締まれずいるのは、頼光が政道に疎いからであると、訴えている。「御政道くらし」との政道批判は、『枪狩剣本地』にも、見られる。『枪狩剣本地』の主人公、平惟茂は『大日本史』(巻百四十列伝六十七)によると、「勇略」ある人物とされる。『枪狩剣本地』において、戸隠山の鬼退治を命じられるのは、内裏内にあらわれた変化を退治した功

47) 近松全集刊行会(1990)『唐船噺今国性爺』、近松全集十二、p.337
48) 近松全集刊行会(1987)『酒呑童子枕言葉』近松全集六、 p.49

교보문고 KYOBO Book Centre

によるものであった。これは、『平家物語』巻四や謡曲『鵺』における、頼政の鵺退治の話を踏まえたものである。頼政は、内裏にあらわれ、天皇を病魔に陥らせた鵺を退治した功により、獅子王の名を持つ名剣を賜った。近松は『枹狩剣本地』において、この頼政の伝説を踏まえたのである。

惟茂は、内裏の変化を退治したことから、天皇や諸卿に「古今無双の弓取」、「惟茂が弓箭の徳」と称えられていた。中世まで、主な武器は弓矢であり、「弓箭」は武士を象徴する武具であった。『枹狩剣本地』の初段で注目されるのは、「武」について説いていることである。惟茂が変化を退治し、余五将軍の名を下賜されたことを、橘諸任が妬み、「天子にむかつて弓引道理」と、難癖をつける。さらに「弓矢の法」も知らぬ者を詮議もなく将軍と宣旨するのは、「御政道くらき事」と、諸卿を非難する。その主張を聞いた侍所の帯刀太郎が、次のように「弓矢の法」を説き聞かせる。

> それ弓矢といつは神武不殺の威徳を表し。物に疵付殺さね共弦音計にて。化生変化を亡ぼす事。たとへば仏心の札守にて悪魔を払ふにことならず。かたじけなくも天照太神天の鹿児弓羽々矢をもつて。悪神をしづめおはします此理をさして。神通の鏑矢と号し。仏道にては大悲の弓智恵の矢共さとる也[49]。

帯刀太郎は、『易経』「繋辞伝上」の「古之聰明睿知、神武而不殺者夫」を踏まえ、神武をそなえながらも、むやみに武力を行使して殺害を犯さないことをよしとする。弦の音を鳴らすだけで、化生変化を退治するということは、『平家物語』巻四「鵺の事」を踏まえているのであろう[50]。さらに、高皇産霊尊が瓊瓊杵尊を葦原中国に降臨させる前に邪神を平定させるため、天稚彦に天鹿児弓と天羽羽矢を授けた神話をもとに、天照大御神が弓矢をもって悪神を鎮圧したことを引き合いに出す。すなわち、惟茂も実際に弓で変化を射殺したのではないことをいう。そして、弓矢(武将)とはどうあるべきかを次のように語る。

---

49) 近松全集刊行会(1988)『枹狩剣本地』近松全集九、p.368

50) 「堀川の院御在位の御時、主上しかの如くおびえたまぎらせ給ひけり。その時の将軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御悩の刻に及んで鳴弦すること三度の後、声高に前の陸奥の国の守源の義家と名乗りたりければ、聞く人身の毛よだつて、御悩必ず怠らせ給ひけり。」

교보문고 KYOBO Book Centre

凡大将たる身の弓は袋剣を箱に治ながら。東西南北の敵をしづめしりぞくる。一帳弓の理に至るを精兵の射手共。又は文武両道の。弓取共是を名付たり[51]。

弓、剣を用いず天下を治めること、すなわち一張りの弓をもって天下を治めることを、真の弓取であるという。これは『相模入道千疋犬』(1714)に、「朝敵神敵一時にほろひはつるも源氏の武運。新田の威勢かゝやきて。帝重祚ましませは。将軍も還補有。武士は弓矢を袋に入。干戈を箱に治る御代」と、見られるように、天下泰平なさまをあらわす表現でもある。武力を直接用いずとも、世が治まるのを理想の政治としているのである。

『関八州繋馬』では、「内に仁愛を施し。外厳しく警護せば刃も用ず徳に随ひ。自治る道理。」と、治世の理想像が明言されている[52]。為政者たる者は、「刀」の力ではなく、仁愛の徳を持って天下を治めるべきであるということを説いており、『唐船噺今国性爺』において、説かれた為政者のあり方と通じていた。『関八州繋馬』において、頼光は勅命を受け、内裏にあらわれる化生を、源氏重代の鏑矢で退散させる。大序において、「東条兼家公万機を摂政し。参議江文の為成卿参り議るの職に進み。六孫王の嫡流鎮守府の将軍。源頼光父祖の業を継で、君文を以て四夷を撫で。臣武を以て八蛮を鎮めしかば。行者途に棄たるを拾はず。耕す者扑て謳ひ。四問熙々として和ぐ。民とは此時也。」[53]と、世が安泰に治まっていることをあらわしている。これは、次のように、『平治物語』冒頭を踏まえたものと思われる。

ひそかにおもんみれば、三皇五帝の国をおさめ、・四岳八元の民をなづる、皆是うつはものをみて官に任じ、身をかへりみて禄をうくるゆへなり。(中略)帝王の国

51) 近松全集刊行会(1988)『桝狩剣本地』近松全集九、p.368
52) 特に、次のように望ましい政道について述べている。「小智は大道の妨。大国を治るは小鮮を煮がごとく。雑魚小鮒を煮るに弄ひ過でば。鱗も鰭も一つに崩れ魚の形を失ふ。公の政道まつ其ごとく。其職に居て政道を取行ふ役人の心持。近ふ言はば重箱を糯粉木で洗ふ様にする物。国を重箱に譬へ政道を糯粉木に表し。彼重箱を洗ふがごとく。角々へ遣届けず大様にもてなせば。器も損ぜず国全たし。是聖代の政。(中略)内に仁愛を施し。外厳しく警護せば刃も用ず徳に随ひ。自治る道理。」近松全集刊行会(1990)『関八州繋馬』近松全集十二、pp.626-627
53)近松全集刊行会(1990)『関八州繋馬』近松全集十二、pp.605-606

교보문고 KYOBO Book Centre

をおさむ、かならず匡弼のたすけによると云々。国の匡輔はかならず忠良をまつ。任使其人をうるときは、天下をのづからおさまると見えたり。古より今にいたるまで、王者の人臣を賞ずるは、和漢の両朝をとぶらふに、文武二道を先とせり。文をもつては万機の政を補ひ、武をもつては四夷の乱れを鎮む。しかれば、天下を保ち国土を治むること、文を左にし、武を右にするとぞ見えたる。たとへば人の二の手のごとし。一つも欠けてあるべからず。54)

この序文は「末代における武士の力の必要」性を説くものであり、近松はそれを踏まえて、今の御代が治まっているのは55)、武を高くみなしているためとしているものと考えられる。頼光が内裏にあらわれた化生や鬼を退治する話は、『今昔物語集』(巻二五「春宮大進源頼光朝臣射狐語」)などに典拠があり、これまで考察してきた頼光四天王物にも類話が用いられていた。近松は、武勇に誉れが高く、内裏を悩ます化生を退治する頼光に、皇室だけでなく、国家鎮護の武将としての意味を持たせているのである。これはすでに、酒呑童子を題材とする古浄瑠璃にも見られることで、中世では「武家の棟梁」であった頼光が、浄瑠璃では「天下を治める弓取」と変化していた56)。さらに元禄初期頃の刊行と見られる『前太平記』は、源家の武将の武勇に関する逸話を数多く取り入れており、冒頭の「源家濫觴事」において彼らが王法の守護者として位置づけられている57)。『前太平記』は近松をはじめ、浄瑠璃作者にとって座右の書であったとされており58)、近松が頼光四天王物を作劇する際、多いに参考したであろうと考えられる。

『関八州繋馬』では、「頼光は数代の勲功。国家の政道大小となく任せ仰せ下さるゝ。」と、頼光の武功を称え、国家の政権をゆだねる綸言があった。また、源氏が政権を預かるということは、源氏の流れを汲むと称する徳川政権の正当性を暗示するものでもあった。『酒呑童子枕言葉』や『弘徽殿鵜羽産屋』など頼光四

54) 柳瀬喜代志校注(2002)『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』新編日本古典文学全集41、小学館、p. 409
55) 『神皇正統記』には、「世が乱れている時は武を右にし、文を左にす。国を治められた時は文を右にし、武を左にす」とする。岩佐正校注(1975)『神皇正統記』岩波書店、p.
56) 鳥居フミ子(1993)『伝承と芸能—古浄瑠璃世界の展開—』武蔵野書院、p.50-51
57) 板垣俊一校訂(1988)『前太平記』上、板垣俊一解題、叢書江戸文庫3、国書刊行会、pp.426-427
58) 内山美樹子(1992)「『関八州繋馬』とその周辺」『歌舞伎—研究と批評』8、p. 3

교보문고 KYOBO Book Centre

天王物と異なり、『関八州繋馬』が裁判劇としての形式を持ち、頼光が裁定を下す裁判官として造型されているのは、頼光を為政者として明確化するためのものであった。源氏、そして、その流れを汲む徳川将軍が正しい政治を行い、その結果、国家と民が繁栄するという構想のもと、作劇されたのである。これは、五段目末尾の語りとも対応するもので、「御連枝一所に頼光頼信頼平の。家富栄へ国繁昌尽きせぬ。源氏の御代永く万々歳とぞ祝ひける」と、源氏の繁栄を祝い、徳川将軍の治める世を祝うものとなっている。近松は、剣による武威を強調しながらも、晩年の作品には武力を用いない政道を重視した。源氏の流れを汲む徳川将軍が治める世を支持しつつも、繰り返し、為政者のあり方について説いていたということがわかる。

V. おわりに

近松は正徳期以降、頼光四天王物や、神代物、古代物において、「剣」の物語を展開させていた。頼光四天王物において、剣は、源氏の名剣にとどまらず、日本を治める剣として、意味付けられていた。それは、頼光に当時日本の為政者を仮託したものといえる。また、近松の神代物や古代物において、剣は三種の神器の一つとして、国の安泰を保証するものとして描かれていた。そこには、剣の威力が強調されていた。武威の強調は当時の神国意識、武国意識など自国意識の高揚の雰囲気の中、自国優越主義と結び付きもしていた。ただ、それは外国に向けられただけではなく、国内の世の安泰を導くものとしてのとらえ方であった。世の泰平を保つため、理想的な為政者像や政道を「剣の物語」に仮託したのであろう。そこには、源氏の頼光を流れを汲む徳川の将軍に対する、政治への期待や批判が込められたものと考えられる。

近松の武国観や、三種の神器観については、国学や、神道などの影響など、さらに考察されるべきことは多い。この点については、今後の課題としたい。

교보문고 KYOBO Book Centre

참고문헌

岩佐正校注(1975)『神皇正統記』岩波書店、p.
板垣俊一校訂(1988)『前太平記』上、叢書江戸文庫３、国書刊行会、pp.426-427
国書刊行会(1910)跡部良顕『三種神器極秘伝』、神道叢説、p.304
小島憲之(1994)『日本書紀①』新編日本古典文学全集、小学館、 p. 93
古山弘志校注(1998)『謡曲集②』新編日本古典文学全集、p.483
守髄憲治校注(1959)『近松浄瑠璃集』下、日本古典文学大系、岩波書店、p.380
平重道校注(1972)山崎闇斎『神代巻講義』『近世神道論前期国学』日本思想大系39、p.170
近松全集刊行会(1987-1990)近松全集六～十二、岩波書店
永井一孝校注(1910)『平家物語』、有朋堂、p.1
柳瀬喜代志校注(2002)『将門記・陸奥話記・保元物語・平治物語』新編日本古典文学全集41、小学館、p. 409
内山美樹子(1999)『浄瑠璃史の十八世紀』勉誠社、pp.41-94
木谷蓬吟(1947)『近松の天皇劇』淡清堂、pp.63-266
鳥居フミ子(1993)『伝承と芸能―古浄瑠璃世界の展開―』武蔵野書院、p.50-51
白方勝(1993)『近松浄瑠璃の研究』風間書房、pp.226-362
近石泰秋(1965)『近松浄瑠璃の研究』風間書房、p.59
玉懸博之(2007)『近世日本の歴史思想』、ぺりかん社、pp.109-128
森山重雄(1981)『近松の天皇劇』、三一書房、pp.7-300
亘理章三郎(1943)『日本魂の研究』、中文館、p.413
韓京子(2014)「近松の浄瑠璃における台湾への関心」『日本学研究』42、pp.150-153
井上勝志(2004)「『枌狩剣本地』の主題と手法」『＜特集＞近松』江戸文学30、ぺりかん社、pp123-135
内山美樹子(1992)「『関八州繋馬』とその周辺」『歌舞伎一研究と批評』8、p. 3
諏訪春雄「近世文芸のナショナリズム―下凡・本解・本地―」『日本文学』2007年１月
近松古代史話会(1992) 「近松の古代史」『歌舞伎研究と批評』8, pp.171-172
前田勉(1997)「近世日本の「武国」観念」、玉懸博之編(1997)『日本思想史その普遍と特殊』、ぺりかん社、pp231-253
前田勉(2001)「「武国」日本のなかでの朱子学の役割」『日本思想史学』33、p.32

❖ 투고일 : 2014.06.30
❖ 심사완료일 : 2014.08.04
❖ 게재확정일 : 2014.08.12

교보문고 KYOBO Book Centre

Abstract

近松の浄瑠璃における「剣」の物語

韓京子

本稿は、江戸時代の劇作家、近松門左衛門が、浄瑠璃の中で、剣にどのような意味を持たせ、何を描き出そうとしたのか、また、どのように物語として展開させているのかを考察するものである。これらの作品が近松の晩年に集中していることから、近松の晩年の作品の特徴である、為政者や政道のあり方を説いたり、日本の起源についての関心などが、剣の物語として、どう組み込まれているのかを考察した。剣の物語は近松の頼光物や所謂天皇劇に描かれているが、従来の研究においては注目されてこなかった。『平家物語』「剣巻」をはじめとする一連の『剣巻』物語が作られるなど、剣への関心は中世から近世にかけて高まっていた。さらに、近世になって高潮した武国観もその背景にあるものと考えられる。頼光四天王物は、古浄瑠璃である金平浄瑠璃の流れを組むが、近松は、正徳期以降に集中して作品化している。その中で剣は、源家重代の宝剣としてだけでなく、日本を治める剣として、意味付けるなどの変化が見られた。それは、頼光に日本の為政者を仮託したものといえるのである。また、近松の神代物や古代物において、剣は三種の神器の一つとして、国の安泰を保証するものとして描かれていた。そこには、剣の威力が強調されていた。武威の強調は当時の神国意識、武国意識など自国意識の高揚の雰囲気の中、自国優越主義と結び付きもしていた。ただ、それは外国に向けられただけではなく、国内の世の安泰を導くものとしてのとらえ方であった。近松は、世の泰平を保つための理想的な為政者像や政道を「剣の物語」に仮託したのであった。

Key Words：近松門左衛門、浄瑠璃、剣、為政者

교보문고 KYOBO Book Centre

Abstract

The "Tales of Swords" Portrayed in Joruri by Chikamatsu Monzaemon

Han, Kyoung-ja

This study examines what Chikamatsu Monzaemon, Japanese dramatist of the Edo period, tried to represent in his joruri, what he intended to depict with the motif of swords in joruri, and also how he unfolded the plots of his dramas in general. Considering that these works were produced mostly in the latter years of Chikamatsu's life, this study examined how his interest in politics, society, and the origins of Japan, along with his thoughts on the attitudes of contemporary politicians and the course of politics are depicted in the "Tales of Swords." The interest in swords increased from medieval to modern times, creating many tales such as the series of Tsuruginomaki tales, including "Tsuruginomaki" in the *Heike Monogatari*. Chikamatsu's heightened view of a military nation in medieval times may also have influenced his adoption of "Tales of Swords" in his work. In his *Raiko* series (with Minamotono Yoritomo as the main character), Chikamatsu gave a new meaning to the sword, stating that it was not only a formal sword of honor that had been passed down for many generations in the Genji family, but also a sword that ruled over Japan. Thus, he is representing Yoritomo as a statesman of Japan. In Chikamatsu's works where the setting is the age of the gods or ancient times, the power of swords is emphasized and swords are portrayed as guaranteeing the peace of the country. This emphasis on military prestige also led to an ethnocentrism within an atmosphere of heightened patriotism, boosted through the focus on Japan as a divine land and military nation. However, these representations did not really pertain to the relations between Japan and foreign countries but merely to the idea that leaders brought stability to their own country by the monopoly of legitimate force symbolized by their weapons Chikamatsu depicted an image of the ideal politician and the ideal course of politics in the "Tales of Swords." An aspect of the

교보문고 KYOBO Book Centre

dramaturgy of Chikamatsu's later works can be found here.

Key Words : Chikamatsu Monzaemon, Joruri, Sword, Statesman

KYOBO
교보문고

교보문고 KYOBO Book Centre